

2020年度 医学部 IR 報告書
—2019年度 卒業生の初期研修先
アンケート
現状と3年間の傾向—

藤田医科大学 I R 推進センター
医学部 I R 分室

2020 年 9 月 30 日



藤田医科大学 I R 推進センター 医学部 I R 分室

2020年度 医学部 IR 報告書

—2019 年度 卒業生の初期研修先 アンケート

現状と3年間の傾向—

目次

概要

1. 背景と目的
2. 対象
3. 方法
4. 結果 (1) 2019 年度の調査結果
 (2) 2017～2019 年度の推移
5. まとめ

資料 （依頼状、調査票）

2020 年度 藤田医科大学 I R 推進センター 医学部 I R 分室

一瀬千穂、川戸美由紀、古澤彰浩、若月徹、藤江里衣子

山本正樹、中村早紀、島向健太、横田正明、飯塚成志

概 要

「独創的な学究精神を持った謙虚で誠実な医師を育成する。」ことが藤田医科大学医学部の使命であり、卒業時にすべての本学卒業生が身に着ける能力として「卒業コンピテンス（＜医師としてのプロフェッショナルリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学及び関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞）」と、これに対応する「卒業コンピテンシー」を定めている。

数年にわたり本学が取り組んできたカリキュラム改革の効果を評価するため、本学卒業生の卒業時の能力について、第三者の視点が必須であることから、今回 2017、2018、2019 年度の本学医学部卒業生を卒業 1 年目の研修医として受け入れてくださった病院の直接的指導者に、研修 1 日目の「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する諸項目について、その修得度を評価していただき、年度ごとの傾向を分析するとともに、過去 3 年度にわたる経年変化を比較した。

＜医師としてのプロフェッショナルリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学および関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞の 6 項目のいずれにおいても、各年度とも“最低水準は修得できている”と評価するものが 70%を越えている。この中で＜医師としてのプロフェッショナルリズム＞、＜コミュニケーション能力＞を評価するものが多く、一方比較的評価の低かったのは＜専門職連携＞、＜独創的探究心＞、＜地域社会への貢献＞であった。自由記載欄においては、本学卒業生のコミュニケーション能力の高さと研修に熱心に取り組む姿勢を評価するものが多かった。

これらは 2017－2019 年度に共通する傾向と思われる。前者については本学の医学教育の成果は一定の水準に達していると考えられる。後者についてより一層の改善を図っていくことが今後の課題である。

1. 背景と目的

本学医学部は 2015 年度第 1～3 学年よりアウトカム（学習成果）基盤型教育を取り入れた新カリキュラムに移行している。「独創的な学究精神を持った謙虚で誠実な医師を育成する。」ことが藤田医科大学医学部の使命であり、卒業時にすべての本学卒業生が身に着ける能力として「卒業コンピテンス（＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学及び関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞）」と、これに対応する「卒業コンピテンシー」を定めている。

数年にわたり本学が取り組んできたカリキュラム改革の効果を評価するため、医学部 IR 分室では今回、2017、2018、2019 年度の本学医学部卒業生を卒業 1 年目の研修医として受け入れて頂いた病院の直接的指導者に、研修 1 日目の「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する諸項目について、その習得度を評価していただいた。第三者の視点から評価とフィードバックを受け、今後の医学部教育の見直しの資料とする。年度ごとの傾向を分析するとともに、過去 3 年度にわたる経年変化を比較した。

2. 対象

本調査は、2017、2018、2019 年度の各年度の藤田医科大学医学部卒業生であって、翌年度に初期研修を開始した研修医について、その初期研修受け入れ先の施設を対象とした。2017 年度は本学教育病院（藤田医科大学病院、藤田医科大学 ばんだね病院、藤田医科大学 七栗記念病院の 3 施設）以外の施設を調査対象とした。2018、2019 年度は本学教育病院を含む全ての卒業生の受け入れ先の施設を対象とした。調査対象となった研修医の人数は、2017 年度が 72 人、2018 年度が 109 人、2019 年度が 106 人であった。

3. 方法

2017、2018、2019 年度の本学医学部卒業生を 1 年目の研修医として受け入れていただいた病院の臨床研修センター長宛に依頼文と研修医の人数分の質問票を郵送し、研修医の直接的な指導をされた方に、回答と返送を依頼した。調査実施時期は、2017 年度卒業生（2018 年度初期研修開始）が 2018 年 8 月、2018 年度卒業生（2019 年度初期研修開始）が 2019 年 8 月、2019 年度卒業生（2020 年度初期研修開始）が 2020 年 7 月であった。

臨床研修センター長宛の依頼文および調査票を巻末に示す。アンケートには施設名を記入していただいたが、集計・分析は匿名化して行った。

調査票は A4、1 ページのマークシートで、6 つの設問に対して、それぞれ、調査対象の研修医が、研修医 1 年目の初日の能力・資質として、6 段階の評価尺度のどの段階であったかの評価を依頼した。6 つの設問は次の通りである：「＜医師としてのプロフェッショナリズム＞医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている」、「＜コミュニケーション能力＞お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている」、「＜専門職連携＞患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている」、「＜医学および関連領域の知識＞医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている」、「＜独創的探究心＞疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が身についている」、「＜診療の実践＞安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている」、「＜地域社会への貢献＞地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている」。6 段階の評価尺度は次の通りである。1：全く修得できていない、2：十分に修得できていない、3：ある程度修得しているが、最低水準には届かない、4：最低水準は修得できている、5：概ね修得できている、6：完全に修得できている。また、自由記載欄を設定し、「何でも結構ですのでコメントを御願います」と依頼した。この調査内容は 2017 年度～2019 年度の 3 年間で共通である。

2017 年度～2019 年度の年度毎に回答状況を集計し、設問毎に、各選択肢の回答数と未回答者を除く割合を示した。また、3 年間の傾向を見るために、設問毎に、選択肢の 4～6 と回答、すなわち、「最低水準は修得できている”または“概ね修得できている”または“完全に修得できている”」と評価された人数とその割合について示した。

2017 年度と 2018 年度には定量データ（6 段階評価部分）のみ集計したが、2019 年度は定性データ（自由記載欄）もテキスト化した。

4. 結果

(1) 2019 年度の調査結果

2019 年度の調査対象者 112 人に対して、82 人について回答が得られ、回収率は 73.2%であった。

表 1 に 2019 年度の各調査項目における回答の分布を示す。6 つの項目のいずれにおいても、“最低水準は修得できている”の割合が 70%以上であった。＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜医学および関連領域の知識＞では“最低水準は修得できている”の割合がそれぞれ 86.4%、90.2%、86.4%と高かった。一方＜独創的探究心＞、＜地域社会への貢献＞では、それぞ

れ 70.4%、71.3%と低い傾向であった。

自由記載欄には 43 件の回答が寄せられた。内容としてはコミュニケーション能力の高さと研修に熱心に取り組む姿勢を評価し、個人差はあるものの卒後研修を開始するレベルとしては十分であり今後に期待するとの声が多かった。

(2) 2017～2019 年度の推移

2018 年度の対象者 109 人に対して、回答は 80 人について得られ、回収率は 73.4%であった。2017 年度の対象者 72 人に対して、回答は 55 人について得られ、回収率は 76.4%であった。

表 2 に 2018 年度、表 3 に 2017 年度の各調査項目における回答の分布を示す。2018 年度、2017 年度ともに 6 つの項目のいずれにおいても、“最低水準は修得できている”の割合が 78.2%および 83.3%以上であった。両年度とも＜医師としてのプロフェッショナリズム＞および＜コミュニケーション能力＞の習得度の評価が高く、＜独創的探究心＞、＜地域社会への貢献＞は低い傾向がみられた。一方＜医学および関連領域の知識＞は 2018 年度では“最低水準は修得できている”の割合が 78.2%、2017 年度では 93.1%、＜診療の実践＞については 2018 年度では 79.4%であるのに対し、2017 年度では 89%とやや解離がみられた。

図 1 に「“最低水準は修得できている”または“概ね修得できている”または“完全に修得できている”」と評価された割合の 2017～2019 年度の推移を示す。

個人差などがあるものの、2017-2019 年度を通じて卒業コンピテンス・コンピテンシーの修得度に対する評価は、おおむね同様の傾向であると考えられる。ただし年度間の比較において＜専門職連携＞や＜独創的探究心＞、＜地域社会への貢献＞は経年的に低下しているようにも見え、これらの項目について改善していくことが今後の課題である。

表 1. 各設問の回答分布：2019 年度卒業生

	全く 修得 できて いない	十分に 修得 できて いない	ある程度 修得して いるが、 最低水準 には 届かない	最低水準は 修得 できている	概ね 修得 できている	完全に 修得 できている
＜医師としての プロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり 向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている					
	1 (1.2%)	4 (4.9%)	6 (7.4%)	23 (28.4%)	33 (40.7%)	14 (17.3%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くための コミュニケーション能力が身についている					
	0 (0.0%)	2 (2.4%)	6 (7.3%)	22 (26.8%)	38 (46.3%)	14 (17.1%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている					
	1 (1.2%)	0 (0.0%)	19 (23.5%)	34 (42.0%)	23 (28.4%)	4 (4.9%)
＜医学および 関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、 応用する能力が身についている					
	0 (0.0%)	2 (2.5%)	9 (11.1%)	41 (50.6%)	21 (25.9%)	8 (9.9%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が 身についている					
	1 (1.2%)	5 (6.2%)	18 (22.2%)	26 (32.1%)	26 (32.1%)	5 (6.2%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が 身についている					
	0 (0.0%)	2 (2.5%)	14 (17.5%)	26 (32.5%)	34 (42.5%)	4 (5.0%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が 身についている					
	0 (0.0%)	5 (6.3%)	18 (22.5%)	28 (35.0%)	25 (31.3%)	4 (5.0%)

() : 未回答者を除く%

表 2. 2018 年度卒業生

	全く 修得 できて いない	十分に 修得 できて いない	ある程度 修得して いるが、 最低水準 には 届かない	最低水準は 修得 できている	概ね 修得 できている	完全に 修得 できている
＜医師としての プロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり 向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている					
	0 (0.0%)	2 (2.6%)	11 (14.3%)	17 (22.1%)	27 (35.1%)	20 (26.0%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くための コミュニケーション能力が身についている					
	0 (0.0%)	1 (1.3%)	12 (15.4%)	10 (12.8%)	34 (43.6%)	21 (26.9%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身につ いている					
	2 (2.6%)	1 (1.3%)	9 (11.7%)	29 (37.7%)	25 (32.5%)	11 (14.3%)
＜医学および 関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、 応用する能力が身についている					
	2 (2.6%)	3 (3.8%)	12 (15.4%)	21 (26.9%)	29 (37.2%)	11 (14.1%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が 身についている					
	0 (0.0%)	7 (9.1%)	9 (11.7%)	27 (35.1%)	24 (31.2%)	10 (13.0%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が 身についている					
	0 (0.0%)	7 (9.0%)	9 (11.5%)	28 (35.9%)	20 (25.6%)	14 (17.9%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が 身についている					
	2 (2.6%)	4 (5.3%)	10 (13.2%)	37 (48.7%)	12 (15.8%)	11 (14.5%)

() : 未回答者を除く%

表 3. 2017 年度卒業生

	全く 修得 できて いない	十分に 修得 できて いない	ある程度 修得して いるが、 最低水準 には 届かない	最低水準は 修得 できている	概ね 修得 できている	完全に 修得 できている
<医師としての プロフェッショナリズム>	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり 向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている					
	0 (0.0%)	1 (1.8%)	0 (0.0%)	19 (34.5%)	26 (47.3%)	9 (16.4%)
<コミュニケーション能力>	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くための コミュニケーション能力が身についている					
	0 (0.0%)	1 (1.8%)	2 (3.6%)	13 (23.6%)	24 (43.6%)	15 (27.3%)
<専門職連携>	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身につ いている					
	1 (1.8%)	0 (0.0%)	6 (10.9%)	18 (32.7%)	25 (45.5%)	5 (9.1%)
<医学および 関連領域の知識>	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、 応用する能力が身についている					
	0 (0.0%)	1 (1.8%)	5 (9.1%)	22 (40.0%)	23 (41.8%)	4 (7.3%)
<独創的探究心>	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が 身についている					
	0 (0.0%)	0 (0.0%)	8 (14.5%)	24 (43.6%)	20 (36.4%)	3 (5.5%)
<診療の実践>	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が 身についている					
	0 (0.0%)	2 (3.6%)	4 (7.3%)	19 (34.5%)	24 (43.6%)	6 (10.9%)
<地域社会への貢献>	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が 身についている					
	1 (1.9%)	0 (0.0%)	8 (14.8%)	20 (37.0%)	21 (38.9%)	4 (7.4%)

() : 未回答者を除く%

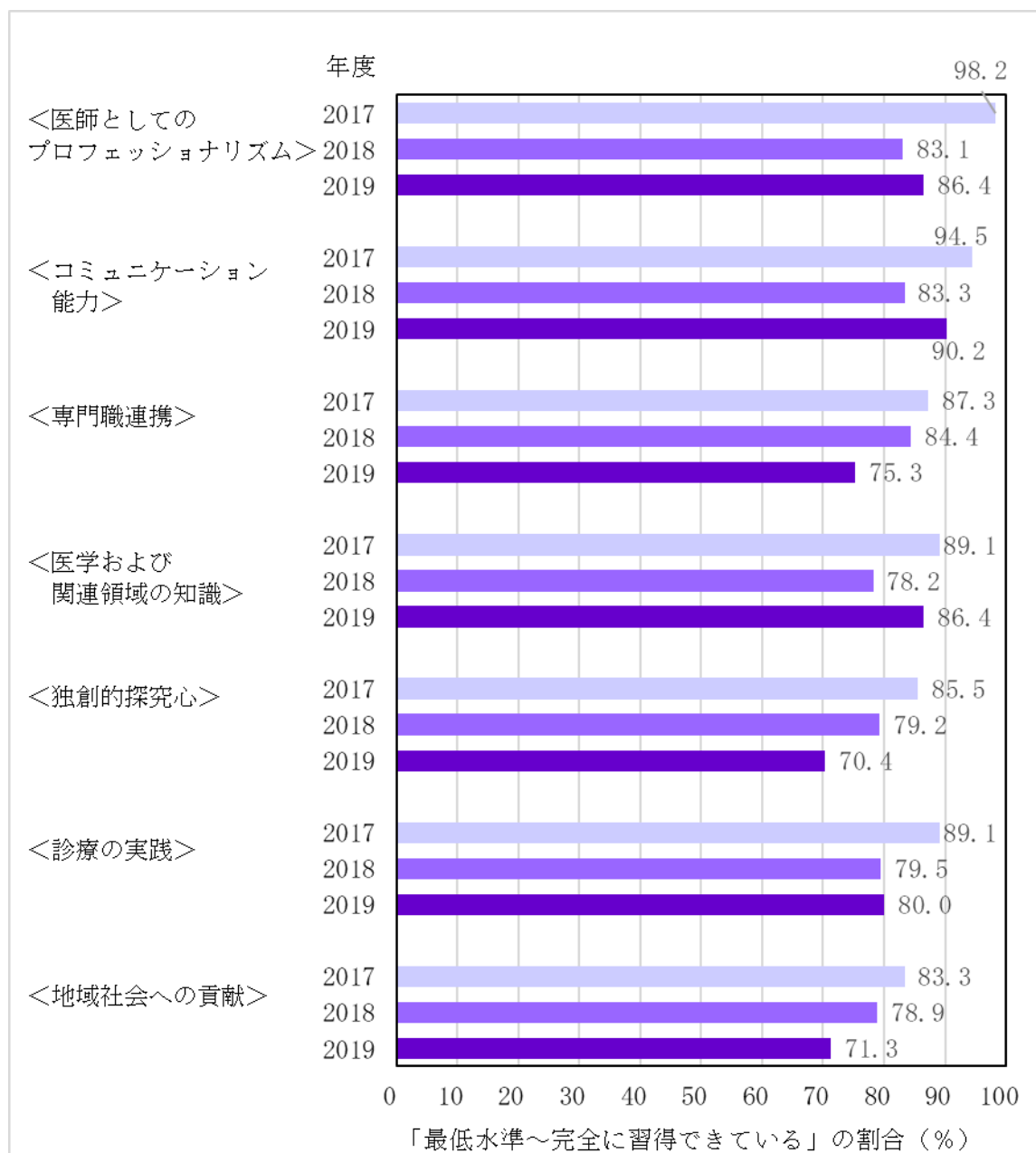


図1. 「“最低水準は修得できている”または“概ね修得できている”または“完全に修得できている”」と評価された割合の2017～2019年度の推移

5. まとめ

2017－2019 年度本学卒業生の初期研修アンケートにおいて、＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学および関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞の6項目のいずれにおいても、各年度とも“最低水準は修得できている”と評価するものが70%を越えている。この中で＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞を評価するものが多く、これらの項目に対して本学の医学教育の成果は一定の水準に達していると考えられる。一方比較的評価の低かった＜専門職連携＞、＜独創的探究心＞、＜地域社会への貢献＞については改善していくことが今後の課題である。

資料 1. 依頼状 (A4、1 ページ)

臨床研修センター センター長 様

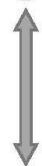
この調査票は、藤田医科大学 医学部が定める「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する第三者評価です。コンピテンス・コンピテンシーとは資質・能力のことです。現在の医学教育は学修成果基盤型（アウトカムベース）となっており、卒業時に身につける能力・資質を最初に規定し、これが学修されたときに卒業を認めております。本学の卒業生が、その能力・資質をどの程度身につけているか、勤務先の上長の皆様に第三者の視点から評価をしていただくものです。

本調査結果は、個人が特定されない形で集計・解析し、今後の本学の教育活動の発展にのみ活用致します。各設問について、どの程度身につけているか、以下の6段階の尺度を用いて、マークしていただけますようお願い致します。

【評価尺度：6段階】

- 1：全く修得できていない
- 2：十分に修得できていない
- 3：ある程度修得しているが、最低水準には届かない
- 4：最低水準は修得できている
- 5：概ね修得できている
- 6：完全に修得できている

① できていない



⑥ できている

また、自由記載欄にコメントを頂ければ幸いです。

複数名の本学出身の研修医 1 年目が在籍する場合は、人数分の評価を御願い申し上げます。

藤田医科大学 医学部
学部長 岩田 仲生
学長補佐 石原 慎

資料 2. 調査票 (A4、1 ページ)

【医学部 コンピテンス・コンピテンシー】

研修医 1 年目の初日の能力・資質として御判定下さい。

No	評価項目	評価	●
1	<医師としてのプロフェッショナリズム> 医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	
2	<コミュニケーション能力> お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	
3	<専門職連携> 患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	
4	<医学および関連領域の知識> 医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	
5	<独創的探究心> 疑問点を解決するために行動する独創的な学習精神と科学的能力が身についている	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	
6	<診療の実践> 安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	
7	<地域社会への貢献> 地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	
●			●

自由記載（何でも結構ですのでコメントをお願いします。）

施設名：